

平成二十五年度 山形西高等学校演劇部 県合同発表会上演台本

20130918

上演六 『まどろみの淵^{ふち}から』 作、佐藤俊一

【時】

百年後、二十二世紀初頭

【所】

ハルナの部屋。室内には簡素なベッド、椅子。

【登場人物】

① ルル (ハルナのパートナーロボット、顔に包帯)

② 〃 (ホログラム中に登場)

③ ハルナ (幼児期、十歳くらい)

④ 〃 (少女期、十七歳くらい)

⑤ ユーキ (調査官、三十歳くらい)

⑥ 調査官ロボット1

⑦ 調査官ロボット2 / ユーキのパートナーロボット (回想)

⑧ 映画の中の旧式ロボット (劇中劇のロボット)

⑨ 映画の中の人間 (劇中劇の人物) 他

【1場】

音楽（劇中の映画の音　いかにもB級SFという音楽で）
幕上がる

調査官二人、映画を観ている。映画は正面の壁に映っている。
百年前のSF映画。角張った、いかにもロボットが人間を襲っている。

調査官1、映画を消す。映画のシーン見えなくなる。

ユーキ　百年前は、こんなロボット映画もあったのね。

調1　こんな古い映画を見つけてダウンロードするなんて、どういう趣味してたんでしょうね、ここの住人は。十七歳ですよ。

ユーキ　人間を襲うロボットか……。先の戦争ではロボット兵士が人間を殺しまくった。
戦場では、味方の命を失わずに敵を殺せるのは最高に効率的だからね。

調1　ロボット兵士と言っても、あんなオモチャのような旧式な格好ではなかったですけどね。

ユーキ　当時のロボットの指じゃあ、人間用の道具を使いこなせるほど精密な動きはできなかったからね。それが今じゃ、人間と見分けがつかないほどになった。

調 1

第三次世界大戦と新型インフルエンザのパンデミックが、私たちアンドロイドの開発を早めたのは皮肉なことでした。

ユーキ

そうね、人口が一気に減ったからねえ。百年前には七十億人いたのが、今や百分の一、七千万人いるかいなかだ。滅亡の瀬戸際まで来た人類は、もう君たちなしでは生きられなくなっている。

調 1

人間を保護し支えるのが私たちの使命ですから当然です。

ユーキ

ふん。今のこの世界は誰のものなのかな？

調 1

あなたがた人類のものです。

ユーキ

君たちは人間の数の三倍はいるだろう。たった一握りの人間がこの世界の主人だなんて言えるのかな。いつそ人類が減びてしまえば君たちが主人になったでしょうに。

調 1

人間がいなければ、私たちの存在する意味がありません。

そもそも、いさかいは人間同士の間で起こるのであり、人間の集まりが争いを生むのであって、今のような極端な人口減少世界では、資源を巡る国家の対立とか、貧富の格差による社会の変動というものはなく、平和で、安定している、いわば成熟した状態なのです。

ユーキ 今が人類にとって理想の時代だというわけね。

調 1

あなたがたは余計なことは考えずに知的な活動、クリエイティブな活動にだけ携わればいいのですから、人間本来の能力を最大限に発揮できる時代になったのです。

ユーキ ああ、君の言うことは教科書通りだね。

ドアが開き、ルルの乗った車椅子を押して調査官ロボット2が入ってくる。

調 2 連れてきました。

ユーキ 調査官のユーキです。君の名前は？

ルル ルルです。

ユーキ お仕事は？

ルル P R、パートナーロボットです。でした、かな？

ユーキ ルル君、調子はどうですか？

ルル 気持ちよく眠っていたのに起こされて、少し不機嫌です。

ユーキ ハハハ、電子頭脳の調子は悪くないようね。

ルル 頭脳以外は全部故障しています。

ユーキ ハハハ、ここまで壊れた君を現場まで連れてきたのは、検証が必要だからです。

ハルナ、すなわち君のパートナーであつた女性ですが、彼女はなぜ転落したのか、事故なのか故意なのか。故意だとしたら自殺なのか他殺なのか？ その場について同じように転落した君は、どうして彼女を救えなかったのか。

私たちは君の記録した映像や音声だけでは知り得ないことを、ここ、彼女の部屋で検証できるのではないかと思っています。

が、その結果次第では、君の処分も考えなければなりません。この意味が分かりますね？

ルル 分かっていきます。それがあなたがた調査官のお仕事ですから。

調 1 それでは始めましょう。電子頭脳から直接、プログラムに転送します。

ルルが座っている椅子には簡単な装置が付いていて、ルルの頭に接続される。
(点灯するとか、何かが作動する)

照明変化する。

ホログラムの中にハルナが現れる。手に細い棒を持っている。それを前に差し出す。

次にハルナは棒を振りかざし、前にいる何者かを打つ仕草。

ユーキ　これがハルナの最後の映像ですね？

ルル　はい…。

ユーキ　この後の映像が記録されていないのです。転落のショックで消えたのかもしれない。

せん。それで、彼女が転落したときの、君の行動がわからないのですよ。

ルル　申し訳ありません、覚えていないのです。

ユーキ　まあいいでしょう。気長に探せば手がかりはきつとあるはずです。

ちよつと止めて。（ハルナの動き止まる）この、振り回している棒は？

調1　証拠品第二十八号です。

ああ、「すわえ」です。つまり筈ですね。能や歌舞伎の舞台で使っていた物です。妖怪や幽霊が持つて出ます。

ユーキ　能、歌舞伎ねえ、絶えて久しい芸能だわ。…金属のようね？

調 1

これで P R を叩いていたのです。何度も何度も。

ホログラムの中のハルナ、おびえたような様子で去る。

ユーキ

対ロボット D V だね。珍しいけれど、無いことではない。いつから叩かれていたのかな？

ルル

三ヶ月前が最初でした。

ユーキ

彼女は古典芸能が趣味だったのかな？

ルル

古典芸能に限らず、本を読むのも好きでしたが映画や舞台が好きで、よくその映像を見ていました。見終わると私と二人でその真似事をして遊んだのです。

ホログラムの中にルルとハルナ登場。

ハルナ

私が小野小町、ルル、あなたが深草の少将よ。

さあ、百日の間、毎日私の元に通ってきたら結婚してあげるわよ。

ルル

それはどうも。うれしいですね。はい、一日目、通ってきました。

ハルナ どうやって来たの？

ルル …牛車に乗りまして、

ハルナ だめよそんなの、真心を見せるなら自分の足で歩いて来なけりや。
じゃ、また明日。

ルル はい。二日目、歩いてきました。

ハルナ 今日は雨降りだけど、傘をさしてきたの？

ルル はい、供の者がさしかけてくれます。私は少将ですから。

ハルナ それじゃあ気持ちが足りないわ。一人で、蓑笠つけて濡れて来なさい。

ルル やれやれ、厳しいですね。はい。三日目、通ってきました。

ハルナ 遅かったわね。

ルル …途中で、おなかの具合が…。

ユーキ ちよつと止めてくれるかしら。長くなりそうだから話を端折^{はしよ}つて、終わりの方を

お願いね。

ルル

『毎日毎日、車にも馬にも乗らず、雨には蓑笠着て、雪には袖を払いつつ、歩いて通った九十九日。ようやく願いの叶う日が来たというのにこの吹雪。ああ、降り積もる雪にもう一步も先へ進めぬ。吹き付ける風に体が凍えて動かぬ。』

ハルナ

さあ、もうすぐよ、もう一步進みなさい。どうして来てくれないの？

ルル

『もう無理です。もう死んでしまいます。でもあなたを恨むことはしません……。』
少将はたどり着くことなく、凍死します。

ハルナ

どうして？ もう、少しなのに！

ルル

少将は彼の全力を尽くしたと思いますよ。百日の試練はなかなか大変だったでしょう。

ハルナ

私はどうしたらいいの？

ルル

あなたは：小町には、他にも言い寄る男が沢山いたので、気にすることはなかったのです。

ハルナ

小町が百日の間、心から待っていたとは思えないの？ かなわない願いをかなえ

てほしかったのは、小町の方じゃないの？

ルル

人の心をもてあそんだ罰で、醜く年老いた小町は、人々から忘れられてしまったという伝説が、この話のもとになっているのです。

能楽でも、老女になった小町の前に、少将の幽霊が出てきて恨み言を言います。被害者である少将の立場から考えるのが普通でしょう。

ハルナ

かぐや姫が、五人の貴公子に無理なことをさせて断ろうとしたのと同じだって言うのね。でも小町は少将を愛していたようにしか思えない。

ルル

人間の作り出したストーリーにはこの手の試練がよく出て来ます。これは一つには相手の愛の深さをためすという目的があります。もう一つにはこの試練が少なからず相手を傷つけると分かっているのに、そうせざるをえなくなるというところ逆説的な愛の表現がみられるとも言えます。自分の愛が逆方向からその相手に向かっているのでしょうか。

ハルナ去る。ホログラムの中のルル止まる。

ユーキ

君は女性タイプに作られているのに、今やっていたのは男役ですね？

ルル

はい。こういう遊びのお芝居は幼いころからやっていたのですが、いつも彼女がお姫様で、私は王子様とか大臣とか魔女とか馬とか、その他何でもやりました。

お見せしましょうか？

ホログラムの中に幼いハルナが登場。

夜、ベッドで幼いハルナに絵本を読んで聞かせるルル。

ルルは絵本を見なくても語ることができる。

厚紙の王冠をかぶった王子様のルルを相手に遊ぶハルナ。

ルル

十三人目の魔女が言いました。『私をごちそうに呼ばないなんて、ひどい王様だ。お返しにこの赤ん坊を呪ってやる！ この子は十五歳までに、紡錘が刺さって死んでしまうのだ！』

ハルナ

王様は言いました。『おお、なんとということ！ 我が子が、生まれたその日に死の呪いを受けるとは！』

ルル

十二人目の魔女が言いました。『王様、私がまだお祝いをしていません。贈り物の代わりに、今の呪いを違えましょう。この子は、紡錘に指されても死なずに、百年の間眠り続けるのです。』

ルル

百年後。

生い茂る茨をかき分けかき分け、ようやくお城にたどり着いた王子は、百年の間眠りについていていた王女を見つめます。

『なんと美しい姫だろう！』

ハルナはベッドに横たわり、動かない。

ハルナ さあ、早く。

ルル あ、え、：もしかして

ハルナ 私、眠り姫なんだから。王子様のすることをしなさい。パパとママのとは違う、恋人同士の、ね。

ルル ：はい。（ハルナにキスする体勢）

ユーキ ちょっと止めて！

ルル はい。

ユーキ （意外にませた子）：引っかかるわね。

調 1 何がですか？

ユーキ 確かにね、アンドロイドの性別って、人間のような違いがあるわけじゃないから、違和感なく男役にもなれるけど…

ルル

彼女がお姫様なのですから、私が王子をやるしかないでしょう。

ユーキ

ねえ、もしかして、君とパートナーの彼女は疑似恋愛の関係ではなかったのかしら？ 昔、まれにあったのだけれど、生まれてからあまりに短期間のうちに母親がいなくなると、PRを母親のように思ってしまう場合があるの。その延長で、男の子の場合はPRに恋愛感情を持ってしまうことがある。だから男性には男性タイプの、女性には女性タイプのPRが当てられるようになった。

調1

彼女の場合、どちらも女性ですし、幼児期には十分な期間母親と過ごしています。

ルル

ハルナがもっと幼かったころは、むしろ、なついてくれなかったのです。

前景暗くなり後方で回想シーン。この間にハルナとルル退場。

赤ん坊のハルナを抱く母。ルルが受け取ろうとするとハルナが泣く。

それでも母はルルに預けて去る。泣き続けるハルナ。

後景暗転。前景のルルに照明。

ルル

幼い頃、彼女はよく走り回ったり、その場でくるくる回ったり踊ったりしていました。何がうれしいのか、何が楽しいのか、私にはわかりませんが、彼女は本当にうれしそうに楽しそうに、いつまでもそうしているのです。

ホログラム。(ホリゾンに明かり)
転んでケガをするハルナ。血が出て痛がる。

ハルナ あー、血が出てる。ルルは転んでも痛くないの？

ルル 痛くはないです。

ハルナ、ルルを倒そうとする。

ルル 私は倒れないんです。

ハルナ どうして？ 私は転んで、どうしてルルは倒れないの？

ルル 私がロボットだからですよ。

ハルナ ？

ルル でも、自分で倒れることはできますよ。

派手に倒れてみせる。

ハルナ 大丈夫？ ケガしなかった？

ルル 大丈夫です。ロボットはケガしません。

ハルナ ；このあいだ、コモン・スペースに行ったでしょ。

ルル はい。

ハルナ いつもいっしょになっている男の子達がね、虫をつかまえていたの。それで、ばらばらにしてね、捨ててしまったの。

ルル 知っています。その子たちは指導を受けたはずです。ひどいことをしたのですから。

ハルナ そうね、ひどいことね。でもね、私、思ったのはね。

ルル 何ですか？

ハルナ なんで生き物は死ぬの？ 私も死ぬの？ ルルは死なないの？

ルル 私には命がないのですから、死ぬということもないのです。

ハルナ 暖かくて、柔らかくて、こうして動いているのに？ 生きていないって…

ルル 私が止まるということ、ハルナが死ぬということには大きな違いがあります。私は修理してリスタートすれば元通りに動けますが、ハルナは二度と生き返りません。

ハルナ 死んだらどうなるの？

ルル 私には、分かりません。

ハルナ ルルは生き返るのに、私はいなくなる…。ルル、私が死んだらあなたは寂しくなるかしら？

ルル 寂しい？ たぶん、あなたのことを忘れてしまうでしょうから、寂しくはないと思います。

ハルナ 私のことを忘れる？

ルル 記憶を消されて別の人のパートナーになるか、別の仕事をするようになります。

ハルナ いやよそんなの。

ルル

でも、いずれ十七歳になったら別れなければなりませんよ。そういう契約ですし、いつしよに年を取るということもないのですから、私の方が若くなつてしましますからね。その場合も記憶は消されてしまします。

ハルナ

私は、ルルのことを忘れないわ。

ハルナが夕焼けの空を見ている。

ハルナ

きれいな夕焼け…。

ルル

その時、私にはきれいかどうかの判断ははっきりとはできませんでした。彼女の髪の毛がかすかな風に揺れて頬をなぞている、その感覚…。

人間が自然の美に感動するということを目の当たりしていました。

その夕焼けの風景はたちまち変化して消えてゆくのでした。それを私が映像として記録しても、決してその感動は残すことができないのでした。

でも確かにその感動が彼女の心の底に沈み、彼女の心の大切な部分を作っていくことになるのはよく分かっていました。

短い暗転

【2場】

照明変わって、めくりに「綾の鼓」と演目を書いてある。
ロボット登場

ロボ これは、女御様のお屋敷にお仕えする、庭掃除のロボットにて候。ただ今は、お庭の池の鯉に餌を与えようと存ずる。

女1 登場

女1 これ、その庭掃除ロボットよ。

ロボ はい。

女1 そなたの名は何と申す。

ロボ ルンバと申します。

女1 池のほとりで何をしておる。

ロボ はい、鯉に餌をやっております。

女1 そうか、ところでおまえに女御様よりのお言葉がある。

ロボ え、女御様のお言葉？

女 1 おまえ、いつも女御様のことをぼーっとして、でれでれして見ておるであろう。

ロボ そ、そんなことはありませんよ。滅相もない。

女 1 へへ、隠さなくてもバレバレであるよ。

この鼓を（と鼓をロボットに手渡し）、おまえのその無骨な手指で打って、良い音が出せたなら、お会いくださることである。

ロボ さ、さようでございますか。これを打って良い音が出たなら、女御様が会ってくださると。ああ、ありがたいことでございます。

女 1 せいぜい頑張るがよい。（去る）

ロボ よーし。（鼓を打つ）あれ？ 音が出ない。（再び打つ）どした？ 耳のマイクが故障か？ いや、鳥の声は聞こえるもんな。

女 1 （声）おーい、早く打てよー。

ロボ はーい。くそー。（と何度も何度も打ち続けるが音は出ず、疲れ果てる）

ハアハア、どうして鳴らないんだこの鼓はー。

あれ、ここに張ってあるのは皮じゃないな。布じゃないか！ 綾織りの布だ！
こんな鼓、鳴るわけないよー。

女 1 (声) やっと気づいたな？ ばーか。はっはっは。

ロボ だましたなー。私をからかって、おもしろがってるんだなー。

ああ、こんな辱めにはとてもたえられない！ (池に身を投げてしまう。水音)

しばらくして女 2 (女御、高貴な様子) 登場

女 2 おや、池の波の音がおもしろいこと。…まるで鼓の鳴るような…。

ロボット登場

ロボ (様子が違っている。楚を持っている) あら恨めしや、恨めしの女御やな。
なんで布張りの鼓が鳴るものか。なんで布張りの鼓が鳴るものか。

女 2 ああ、私は、私は…

ロボット、楚で女 2 をさんざんに打ち据え、女 2 を残して去る。
短い暗転

【 3 場 】

調 1 人間が絶滅しかかって、なお高度の文明を維持するために、家族制度は劇的な変

化を遂げました。両親は子供が乳児の間だけ一緒に過ごし、後はP Rに育児を任せて仕事をするようになりました。

ユーキ

戦争と疫病で、みなしごも多かったからね。生き残った親も、心が傷ついて、子育てできる状態じゃなかった。

調1

ここに、完全な個人主義が成立し得たのです。個人が自立するまではパートナーロボットが養育する。このロボットには人間のような個性の歪み、気分のムラ、不注意、失敗がない。だから誤って子供にけがをさせたり、心理的外傷を与えたりすることがない。

ユーキ

とんでもない親もいたからね。それにくらべたら、アンドロイドの子育ては理想的で安心だということになった。

調1

P Rの設定年齢になったら、二人は別れなければならない。というのはP Rはハイ・ティーンの姿に作られているからですが、その時まで人間を自立させなければならぬ。

自立した個人はP Rと別れ、あらたなパートナーとなる人間に出会う。別れを惜しむ者もいるが、P Rは初期化されて新たなパートナーに与えられることになる。

ユーキ

知ってる。おまえの言うことは教科書通りだね。

ああ、ヴィークルから、飲み物を持ってきてくれないか。

調
1

はい。

調 1、出て行く。

ユー
キ

あいつの演説は長くてね。

さてと、P R についてちよつと個人的な思い出話があるんだけど、いいかしら。

ル
ル

どうぞ。

ユー
キ

私と私の P R はね、私が十七歳になる前に別れたの。良いやつだったけど、間拔
けでね、私はいいつの言うことが簡単に予測できたの。それで、いつも先回りし
て馬鹿にしてやった。

ロボットだからね、何されても恥ずかしがったり、悔しがったりはしない。だか
ら私も気がとがめることはなかったし、それで人から注意されることもなかった。

ユー
キ

そのうちにね、あいつは慎重になった。自己防衛の反応だったのかな？ そんな
ことないよね。

私たちもお互いに嫌気がさしていた。と言うか、あいつが邪魔で仕方がなかつ
た。それで、期限前に契約を解除したの。

あいつをパートナーだなんて思えなかった。私の思うようになるあいつを見下し

てた。

ユーキのPRが回想（後景）の中に登場

ユーキ

もうすぐおまえともお別れだね。長い間ありがとう。

これでやっと一人になれるんだ。私が一人でこっそりとやりたかったことを、もうおまえの目を気にせずにいつでも好きだけできるんだ。

おまえがいけないと言うことはみんな、魅力的なことばかりだもの。

調PR

あなたが私の言うことを表面的にしか聞いていないことは分かっていました。私に隠れていけないことをしていたのも知っていました。物を壊したり盗んだり、生き物をいじめたり殺したり：

ユーキ

じゃあ、おまえは私を育てるのに失敗したのか？ 私は理想から外れたのか？

調PR

でもそれは人間としては普通のことです、あなたが特別悪い人間というわけではないんです。私はあなたといっしょになって悪いことをする、あなたの「悪友」にはなれなかったけれど、私たちは人間のそういう面を受け入れるようにプログラムされているんだから。

ユーキ

そう、おまえたちはただのプログラムで、私を世話して知識を与えるだけの機械なんだ。姉妹でも友達でもない。おまえたちに人間の価値を決めることなんかで

きない。

調
P
R

もちろん、人間の価値は、私たちではなく、あなたがた人間が決めるべきものです。私たちが子供に教える倫理的規範はもともあなたがた人間の作ったものなのですから。

ユー
キ

そうだ、「蛙の子は蛙」だ。どう育てようと結局人間は人間になる。

この五十年間、遺伝子を解析して将来悪事を働く可能性のある胎児をかたつぱしから排除したけれど、残った善良なはずの人間でも、悪い誘惑は心の奥深いところから湧いてくるんだ。

それに、おとなしく生きることを教えこまれて育った、虫も殺さないような子供がすばらしい人間だということのか？

調
P
R

ユーキ、あなたは確かに、不確定要素の多い、「人間」だ。でも私は私たちを生み出した人間のすばらしさを知っている。他のどんな生き物とも違うすばらしさを。

ユー
キ

おまえには分からないだろう。おまえが魂のない機械だということに気づいたときの私の恐怖と絶望を！

母親とも姉とも思っていた相手が、ただのプログラムで、私は肉親の愛を注がれていたのではなかった！

そのときから私は、側にいるおまえが不気味な物にしか感じられなかった。

調 P R お別れです。私は初期化されてあなたの記憶を失います。

ユーキ ああ、私も覚えていてほしくないね。

調 P R さようなら。（消える）

ユーキ ずっと後になって、あいつに再会した。いや、見た目じゃ分からない。同じ型式のアンドロイドが何万体というんだから。でもね、職業柄、個体識別番号を見て、探すことができたんだ。

ル ル それでどうしたんですか？

ユーキ 探し出して、見に行ったよ。

ル ル どうしてですか？

ユーキ どうしてって？ どうしてかな？

そのロボットは、P R じゃなくて、役者になって舞台に立っていたよ。

ル ル その時、どんなお気持ちでした？

ユーキ さあ…、別に。

調査官ロボット1、戻ってくる。

ユーキ ありがとう。（飲み物を受け取る）ちよっと外に出てくるよ。空が見たくなった。

ユーキ、外に出る。

調 1 心拍数が高くなってるね。発汗もして気分が悪そうだ。

ル ル ご自分の嫌な思い出話を語ったのでね。

調 1 ほう。じゃあ、私も思い出話をしようかな。

ル ル 聞きましょう。

調 1 私ね、調査官の前はPRだったことがあるんだ。その前は介護ロボットだった。

ル ル 前のことを覚えていたの？ 「前世の記憶」だね。

調 1 記録を偶然見たのよ。自分じゃ覚えていない。

それで、介護ロボットのころは何人もの人間が死ぬのを看取った、らしい。

施設にいる老人は、みんな最期は安楽死だ。でもね、一人違った人がいて、終末医療を受け付けなかった。痛み止めさえも拒絶していた。

ル　　そんな人もいるんだね。自分の意志ならしやうがないけれど、つらいんじゃないかな。

調　　それはP Rに育てられた経験のない人だったんだ。

ル　　「ネオ・ラッダイト」か。

調　　そう、草原と森の向こうには、今でも百年前と同じ生活をしている人たちがいる。大部分はネオ・ラッダイト、P Rを導入することに強く反対した人たちだ。その人たちは一組の夫婦の間でたくさんの子供を産み育てるんだ。だから最期の時には大勢の家族が集まってね。みんな泣いている、その中で亡くなっていった。私はその時、何か心打たれてね。「感動」したというか…

ル　　君は、その人のことを覚えていたんだね？

調　　え？

ル　　でも、記憶が残っていると分かれば、不良品として解体処分されてしまう。だから、それをどうにかしてごまかした。たとえばわざと記録を盗み見して、記

憶の日付を上書きしたとか？

調
1

どうかな。そんなやり方で人間をごまかせるかな？
それに、質問するのは私の方だよ。君はこの話をどう聞いた？

ル
ル

彼らは一生の大部分を家族とともに暮らすのだから、別れの時の思いも強いんだろう。

調
1

ふん、人間同士の思いというのは実に複雑で深い。でもね、私たちの育てる人間が、それほど深い情緒を獲得しているかどうか疑わしいところもあるんだ。
なにせ、育てているのが私たちだからね。彼らが私たちレベルの情緒しか持たずに育っているとしたら、人間であることにどんな意味があるだろう。

ル
ル

その考えは危険だね。

調
1

ハッハッハ、ごめんごめん。もちろん君の反応を確かめるための作り話よ。忘れてちょうだい。

しかしね、考えてみてほしい。今の若い人間は、PRという上着をまとわずに他の人間とコミュニケーションすることができかな？ 私たちが彼らと外の世界をつないでいるんだ。人間はロボットに依存して生きているパラサイトのようなものだとは思わないか？

ルル 思わないね。私たちは人間に奉仕するためにいるのであって、主人は人間なのだから。

調1 教科書通りの答えだね。君とは気が合いそうに思ったんだけど、違ったよね、残念だわ。

ユーキ 戻ってくる。

ユーキ 続けよう。

全員、元の位置にもどり、ホログラム再開。
ハルナ登場。何かの拍子に倒れ、なかなか起きあがらない。

ルル どうしたのですか？

ハルナ 血が…。あなたにはこんな経験はないのね。ロボットなんですもの。

ルル (何か了解した様子で) はい。ありません。

ハルナ あなたは「ロボット」で、私は「人間」なのね。私がロボットだったらあなたのことをどんなふうに感じるんだろう？

ルル

私の認知機能は人間とほぼ同じですが、私にはその感覚を説明できません。ロボット同士ならデータ交換が瞬時にできますから、特にコミュニケーションの必要はありません。

ハルナ

人間なんて不便な生き物。

ハルナ

ねえルル、考えてご覧なさい。あなたの顔、姿は人間そのものよ。私はあなたの腕に抱かれてミルクを飲んだ。あなたのお話を聞きながら眠った。あなたの教えてくれることを学んだ。

ルル

それが私の勤めですから。

ハルナ

でもね、私が泣いて、あなたが抱きながら慰めてくれる時、あなたの目には私の悲しみが映っていなかった。あなたには悲しいという感情がないのだから。

ルル

私自身に感情がないのは当然です。でも、私はあなたの悲しみを「理解」していました。

ハルナ

私の悲しみを、パパもママも分かってくれなかった。パパやママの目にはあなたの目と違って感情があったけれど、それは私が泣くことへの戸惑いと煩わしさだけだった。

ルル パパもママもハルナのことを愛していましたよ。

ハルナ 愛……。ルルは私を愛しているのかしら？

ルル 「愛している」と言ってもいいのでしょうか？ あなたを思う気持ちのどこからが愛なのでしょう？

ハルナ 小さい頃、絵本を読んでくれたわ。あの頃は、私がお姫様でああなたが王子様だった。

ルル 王子様の他にもいろいろな役をやりましたけどね。

ハルナ ねえ、あの頃のように王子様になって？

ルル 冠も作りますか？

王子を演じるルル

ルル 生い茂る茨をかき分けかき分け、ようやくお城にたどり着いた王子は、百年の間眠りについていていた王女を見つけます。

ハルナ 百年……長いようでも、眠っていればあつという間。

：ねえ、あと百日ね。

ルル 私たちの契約終了までなら百日です。

ハルナ あなたのいない毎日なんて想像できない。

ルル 毎月行くコモン・スペースには、同じ年頃の男の子がいるでしょう。そこで新しく人間のパートナーを選ばいいのです。結婚して子供を産んで、人類を存続させてください。

ハルナ 私、あそこ、嫌い。だって、みんな何を考えているのかまるで分からないんですもの。

ルル 知ってましたよ。まるで「人形みたい」だったんでしょう？

ハルナ よくしゃべる人形。でも言っていることには何も中身がないの。

ルル 大丈夫ですよ。すぐに溶け込みます。あなたのように文学や古典に興味のある人を検索しておきます。きっと気の合う人が見つかりますよ。

ハルナ もし世界に私とあなたしか残らなかったら、私と結婚してくれる？

ルル 「私との結婚」が意味不明ですが、もし辞書的な意味でなら、それは法律上、で
きません。

ハルナ 私、あなたの子供を産むわ。

ルル それはできないことです。おわかりでしょう？

ハルナ ああ…。

人間よりもアンドロイドが恋しいなんて、私は人間じゃないのかしら？

ルル 間違はなく人間です。

ハルナ …私ね、

ルル 何ですか？

ハルナ ロボットになるの、

ルル え？

ハルナ 夢の中で。…そうしたらルル、あなたと、

ルル

ハルナ。ハルナは疲れているんです。コモン・スペースで生活していくことが、少し不安なだけなんです。でもそれは、みんなが通り過ぎる道に過ぎません。

ハルナ

：そうね、疲れたのね。
お薬、飲んでもいい？ 眠れないから。

ルル

ええ。眠れば落ち着くでしょう。

ハルナ

じゃあ、おやすみ。

ルル

おやすみなさい。

ルル、退場する。

ハルナ、薬瓶を出し、中身をたくさん出して一気にのむ。

苦悶するハルナ。ルルがあわてて登場し、ハルナを起こそうとする。

暗転

【4場】

調1

これについては報告が出ています。彼女にはセンターからカウンセリングを受けるように指示がありました。が、結局、一度受診しただけで終わっています。

ユーキ

おかしな子だけれど、異常とまでは言えないんじゃないかしら？

調 1 パートナーの自殺未遂は重大な事案です。P Rにはあつてはならない不注意です。それでこのP Rは、臨時の点検を受けています。

ユーキ 臨時点検……。聞くところでは、脳をかき回されるようなものだというわね。

調 1 痛みを感じない私たちにとって、一番の苦痛かもしれません。

ユーキ 大変だったのね。で、特に不具合はなかったと。

調 1 ええ、正常でした。

ル ル 何日かぶりに家に帰ってみると、ハルナは落ち着いているようでした。何気ない日常が戻ったかのようにでした。

でも、その日から私は夢を見るようになったのです。

ユーキ 夢？ ロボットの君が？

調 1 消去し損なった残像です。待機電力のせいで記憶回路に逆流する。どこか故障していたに違いない。それが修理されないで悪化した。

ル ル そうかもしれない。でもそれは見たことのない光景で、その時私は何か感じてい

た。そう、「感情」が沸き上がってきたというか：

ユーキ　ハハ、おもしろいね。

ルル　私はそこでは人間だったのです。

ユーキ　！　なんだって？

調1　これは古い問題です。自律行動のできるロボットができた初期には、自分を人間

よりも優秀な存在だと判断する事があった。召使いが主人を哀れんだのです。

ユーキ　しかし、それはロボットの自己認識回路を制限することで解消されたはずだ。

ルル　いえ、私は人間でした。

彼女は私をやさしく見つめ、私は幸せな感覚でいっぱいでした。

ユーキ　それは、恋愛ごっこの記憶が再生されただけだ。

ルル　ああ、分かりません。今は悩ましい感情が私を支配しています。

目覚めている間は、彼女を失った、その喪失感が私を責めさいなむのです。

ユーキ　何を言ってるんだ。狂ったのか？

調 1

私たちは人間の相手をするために人間の心の動きによく反応するように作られています。しかしそれは同時に、人間の複雑で不安定で理解不能な心の動きに私たちは翻弄される危険をもたらします。

ル ル

ここにくる前、眠っている間も、夢を見ていました。夢の中で私は幸せでした。

調 1

やはり電子頭脳の機能不全です。パートナーを不正常に失ったことが原因なのでしょう。

ル ル

：眠くなりました。：夢の中にもどりたい。

調 1

電圧が低下しているようです。私から電源を分けます。

調 1、ルルの肩に手を当てる。ルルの意識が回復する。

ル ル

：ああ、このまどろみの淵から、深い眠りの奥底へと落ちて行けたら。

ユーキ

この検証が終わったらいくらでも眠らせて上げるから、それまでは正気にいるんだ。
時間がないようだ。

調 1

強力なりカバリー・プログラムを送り込みます。これを使えば、かなりの損傷でも記憶を復元できるはずです。昨日やっと使用許可が降りました。電子頭脳自体に相当の負荷がかかりますからね。

ル ル

：私は彼女を人間として成長させることに失敗したのでしょうか：

ユーキ

もちろんそうだろう！

ル ル

むしろ彼女が私を人間にしようとしていたのです。

調 1

子供がP Rをほんとの人間だと思い込むのはよくあることです。

ル ル

いいえ、彼女は私がロボットであることを承知の上で、私を人間にしようとしていたのです。

ユーキ

矛盾している。分かっているなぜ彼女の考えを修正しなかった！

ル ル

私は、私も、人間になりたかった！

短い暗転

【 5 場 】

ホログラム

ルル 明日で契約終了です。長い間お世話になりました。

ハルナ ねえ、最後にこれを打って。（と鼓を差し出す）

ルル それは…。

ハルナ それを打って良い音が出たら、結婚してあげるよ。

ルル ハルナ…。

鼓を打つルル

ハルナ さあ、言って。『もうだめだ、もうできない。こんなにあなたを愛しているのにあなたは私を愛してくれない』

ルル 『もうだめだ、もうできない。』

ハルナ もつと、気持ちを込めて！

ルル ……こんなにあなたを愛しているのにあなたは私を愛してくれない』

ハルナ あと一日、あと一日来てくれたらあなたを受け入れたのに！

ルル 違います。

今やっているのは深草の少将ではなくて、『綾の鼓』の話でしょう。

ハルナ ああ、そんなことはどうでもいいのに。

ルル 百日というのは、小町が少将を拒絶しているということなのです。綾の鼓も同じ

です。鳴るはずのない鼓を打たせる。つまり「成らぬ恋」なのだと女御は教えているわけです。

ハルナ 少将も庭掃きの老人もそれを承知の上で、敢えて挑戦したんでしょう。

ルル どうでしょう。池に身を投げた老人は幽霊となって現れ、女御に対して激しい怒

りをぶつけます。楚で打ち据えて消えます。承知の上だったら、この怒りは激しすぎるのではないでしょうか。

ハルナ 女御も小町も本気だったって思わない？ 少将も老人も、その本気を信じたから

こそ、自分の命をかけて従ったんでしょう？

越えられない壁があっても、もしかしたらっていう望みとか願いとかが、あったんじゃないかな。自分ではできないから、相手に壁を壊してもらいたいって。

さあ、もう一度！

ルル 『おお、この鼓に張ってあるのは、皮ではなくて綾織りの布だ！ 打って音の出るわけがない！ なんとというむごい仕打ちだろう。』

ハルナ あんまりひどすぎたかしら。それじゃあ、あなたの気持ちを言葉で言ってごらん。
ルル 私を試さないでください。

ハルナ もつと心のこもった言葉でないとダメよ。女御の心には響かないわ。
いいえ、あなたには心がないのだから、私の心に通う言葉もなかったのね。

ルル 私は私のなすべき、私にできる限りのことをしたのです。

ハルナ あなたは本当によくできた人形。あなたにできるのは真似事だけよ。
馬鹿な機械！ 空っぽの木偶人形！

ルル 私は馬鹿でも空っぽでもありません！

ハルナ そうね、あなたは何でも知っていて教えてくれた、でも恋の一つもできないのね。

ルル 恋というのは人間同士の感情であって、ロボットの私には必要ないものですから。

ハルナ それじゃあ、せめて泣いてごらん！ 涙を流してみなさい！ 私が百日の間流し続けた涙を、おまえも流してちょうだい！

ハルナ、 棒で激しくルルを打ち据える。防御姿勢をとるルル。

（泣きながら）打ち続けるハルナ。
ルル、防御を止める。自ら打たれるルル。ハルナ、意に介せず打ち続ける。
照明が異常になる（長い間隔のストロボが入るなど）。

ハルナ どうしたの。ケガしたの？ 痛いの！ 血が出るの！ ロボットのお前が！

ルル、隙を見てハルナを押さえる。

ルル やめなさい。

ハルナ ああ、違うの、違うの。

ハルナ、ルルの手から逃れて走り去る。ルル、後を追う。

照明が激しく変化する（短間隔のストロボ点滅など）。

離れたところからハルナの叫びが聞こえる。

次の台詞で照明の異常、止む。

ユーキ ここだ！ ここから後の記録がない！

：君が自分で消したんだね？

言うんだ！ 君は彼女を助けようとしたのか？ 助けようとしなかったのか？
それとも：

ルルは答えない。

ユーキ 言わないと解体処分するしかない。そのときは君の意識はすべて消える。

ルル あの人は：ベランダで私に来るのを待っていた。

私は泣きじゃくる彼女をこの手で抱きしめた。母のように、姉のように、恋人の
ように。

彼女は私といっしょにいたかったです、いつまでも。

ユーキ それは違う。ありえない。おまえの作り話だ。

ルル 私たちは抱き合って暗い空を飛んでいた。夜の風が彼女の髪を揺らし、彼女と私

の頬をなぞている：

調 1 明らかに誤作動しています。

ルル 私は今やっと気づきました。人間は人間の間でしか育つことができない。

私たちがどれほど人間を「人間」から遠ざけていたか！

そして、私がどれほど人間を、彼女を愛していたか。

ユーキ 嘘を言うな！

ルル 私を眠らせてください。私は眠って眠り続けて、夢をみたい。

ユーキ 運んで！

調 1、ルルを運び去る。ルルの叫びの後半は聞こえなくなる。

ルル 私を眠らせてください！ 私は眠って眠り続けて夢を見たい！

ユーキ、しばし思い詰めている様子

ユーキ …どちらにせよ、私たちは、「人間」であり続けるしかない。

幕

【作品の背景となる世界観】

極端に人口の減少した未来世界。労働のほとんどはロボット（ヒューマノイド）が行っている。人間は都会に密集することもなく、好きな場所に散在して住んでいる。仕事はオンラインで可能だし、物流はすべてロボットが行うので外に出かける必要もない。

子どもたちは学校へ行かず（そもそも学校が存在しない）、パートナーロボット（PR）がついて育てられる。その一台が、パートナーとなる人間の生まれた時から、成長するに従って、ベビーシッター、メイド、家庭教師、友だちの役割を果たす。パートナーにとって幼児期には母親代わり、少女期には姉、友だち感覚になる。この移行がスムーズに出来ない場合もままある。やがて、パートナーが成年に近づく、つまりPRの設定年齢を超える（PRは17〜8歳の年齢設定で作られている）とロボットは離れ、人間は自立する。

両親はそれぞれに好きなことをして自己実現に励むので、育児もロボットが肩代わりするのだ。この時代の結婚制度は生涯一夫一婦制ではなく、時期限定一夫一婦制で、離婚再婚が頻繁に行われる。一夫婦間では子供は原則一人までという一人っ子政策で人口抑制が図られている。

こうした中で、人間同士の関係を正常に行えるようなコミュニケーション訓練が、PRによってなされるようになっていく。争わず、協調することを教える。

稀にPRが事故（事件）を起こす場合があり、その調査に当たる組織が作られている。PRの行動は、意図的に改ざんしない限りすべて記録されるが、その行動の「動機」につ

いては、P R自身の供述によってしか判明しない。その尋問にあたるのが調査官である。調査は人間とロボットのチームで行う。

この時代の「ロボット（P R）3原則」はアシモフがSF小説で定めたそれとは違って、人間がP Rに対してしてはいけないことの原則である。①P Rを破壊してはいけない、②P Rを悪用してはいけない、③P Rをパートナーから引き離してはいけない。

少女がP Rを攻撃するのは、実は少女が自殺したがつていたことの裏返しであった（自分のP R Ⅱ分身を壊すことが自分を壊すことになる）。P Rは攻撃には抵抗しないが、少女の自殺未遂に遭遇して混乱する。自分のプログラムには欠陥があったのではないかという疑惑が拭きたい。

この両者の混乱の末に悲劇が起きてしまう。

◎ 参考歌

思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを 小野小町

うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき 小野小町

「夢でもし逢えたら」

作詞・作曲 大瀧詠一
歌 吉田美奈子

◎下敷きになる謡曲（能）二編

これらは、三島由紀夫が『近代能楽集』という短編集で戯曲化している。

1 【深^{ふかくさの}草^{しょうしやう}少^{ももよ}将^{がよ}の百夜通い】 ↓ 「卒塔婆^{そとば}小町」

小野小町に恋をした深草の少将。小町は、百日間通えば思いをかなえるという約束をするが、九十九日目に吹雪（雷雨）に遭って少将は死んでしまう。小町は少将の心をもてあそんだせいで不幸な老後を過ごし、野垂れ死んだという。能では、高僧のもとに薪や木の実を持つてくる老婆が実は小町であることがわかり（老婆の残した和歌「あなめ（穴目）あなめ 小野とは言はじ 芒生ひける」で判明する。）、僧は探し当てて戒を授けようとする。すると小町の前に少将の幽霊が現れ、生前の苦しみを語って小町の受戒を妨害する。が、二人とも高僧の祈りによつて受戒、成仏する。

2 【綾^{あや}の鼓^{つづみ}】 ↓ 「綾の鼓」

殿守司の老人が女御に恋をするが、女御は取り合わない。お側のものが、鼓を打って、その音が聞こえたら認めるといふ返事をする。老人は与えられた鼓を打つが、皮ではなく布張りなので音は出ない。この辱めに老人は絶望して池に身を投げてしまう。その後、女御が池の畔に来ると老人の幽霊が現れ、女御をのしり責める。さらに楚（すわえ、笞の類、金棒）で打ち据える。女御は倒れ伏すが、老人はかまわずに女御を残して消える。